全カリ Newsletter No. 23
2008.3.31
立教大学全学共通カリキュラム運営センター

“ほっと一息”から11年

山本　博聖　全学共通カリキュラム運営センター部長（理学部教授）

はじめに

全カリが全面実施されたのは1997年4月からである。その1年前に理学部選出の運営委員として全カリに関与することとなった。当時のわたしの抱いていた気持ちは1997年3月発行の「大学教育研究フォーラム　第2号」のあとがきに寄稿した通りである。そのタイトル“ほっと一息”が実現するまでに11年が経過することになろうとはまったくの予想外である。このレターの最後に参考資料として“ほっと一息”を再度載せさせていただいた。

理学部選出運営委員として全カリへ

当時の理学部長高田教授から声をかけられたのは1996年1月のことだった。そのつい数日前に理学部教授会でわたしの教授昇格人事が見送られたこともあり、どことなくぶっきらぼうに高田先生には対応していたように記憶している。「この4月からの理学部の新たな全カリ委員としてぜひ出てほしい。僕は、山本先生はこういった全学の委員として責任を十分果たしてもらえる方だと思うので送り込みたい。承諾してほしい。」と何の前触れもなく本題を切り出された。自分にとってつらい結論を理学部教授会から突き付けられた直後に理学部選出の全学委員の依頼とは、何とも複雑な心境であった。

生まれてずっと関西に住み、東京には中学の修学旅行と大学受験での滞在程度しかなく、その後神戸の修士課程で当時ひばりが丘にあった原子核研究所に実験の手伝いで宿泊した経験がわたしにとって東京のすべてであった。「立教大学」の名前はやはり「長嶋茂雄」を通して知った。小学6年生の時、風邪で学校を休み寝床でラジオから聞こえる東京六大学の実況を聞いていると、「打ちました、長嶋！新記録です。8号ホームラン！」とのアナウンス。なかなか出ない新記録を待ちわびていた声を代表するかのような絶叫を覚えている。それが「立教大学」がわたしの中に入り込んだ最初であろう。

紆余曲折を経て本学の博士課程6年前期で退学、その半年後に学位取得、しばしの博士浪人後に本学に理学部講師として採用された。幸運である。最近の新任教員人事の激戦の様子とその結果採用された方々の素晴らしい研究歴をみるにつけ、当時抱いていた「本当にラッキーだ」との気持ちがますます強まっている。少し遅れながらも助教授へ、そこからすでにかなりの年月が経過していた時点でのNOの結論はある程度のんびり屋のわたしにもかなり辛い事態であった。

「今の時点で理学部委員として出てゆくことは勘弁してほしい。全学の委員は少し遠慮したい。」これが本音で率直に高田先生にはお伝えをしたが先生はかなり頑固な方で一歩も引かれず、「山本先生しかこの役目を果たせる方は正直わたしには浮かばない。」などと結局説得に負けて、送り込まれたのが実施を1年後に控えた時期だった。寺崎全カリ部長、実松言語部会長、野田総合部会長、そしてあらゆる難題に的確に対応される青木特別教務委員の先生方が並び、サポートする事務局は西田さん、今田さん、田中さん達である。学部運営委員は運営センター委員会にあわせて総合部会か言語部会のいずれかに所属することとなっていた。これも高田部長の指示で言語部会に配置された。学部委員の前任者は本林先生と三木先生で、いずれも学部の大物教授である。物理学科の本林先生は総合担当で、化学科の三木先生は言語部会に所

目次

“ほっと一息”から11年 …… 山本 博聖（1～3）
オンデマンド授業「茶・虎そして人」からの報告 …… 上田　信（4～5）
全カリ科目を担当して：全カリにおける美術科目 …… 黒岩 三恵（6）
2007年度全学共通カリキュラム運営センターの主な活動 ……（7）
2007年度全学共通カリキュラム運営センター　メンバー一覧 ……（8）

属されておられたために、わたしとともに新運営委員となられた化学科の池澤先生は言語担当と思われておられたようで、総合担当と決まった時に「総合はこれからまだまだ議論して詰めてゆくことが多く残っている。スタートを1年後に控えて大変な部会の配置になってしまった。」と言われたことをうっすらと覚えている。わたしは“ほっと一息”に書かせてもらったとおりで、何がどこまで進んでいるのか、これからスタートまでに解決すべきことは何か、はもちろんわかっておらず、1997 年には新たな組織が運営する教養教育全カリが始まる、との意識すらほとんど持ち得ていなかった。なにはともあれ、前任者お二人とも今何が行われているのか、何を学部として決めなければならないのか、など教授会で毎回かなりの時間をかけて報告をされておられた。その役目を果たさなくてはとの自覚はわたしにもあったが、当時教授会で聞いていたその報告で強烈な印象として記憶にあるのは「全カリの会議は毎回10時をまわってもなかなか終わらずしばしば11時を過ぎることもある。」であった。

当時の全カリ運営委員会と言語部会

記録によると1996年度の全カリ運営委員会は23回も開催されていた。聞いていたとおり午後6時スタートの会議が10時までに終了することはほぼ望むべくもなく11時までに終わると、「今日は早く終わったね。」と言い交していた。寺崎部長をはじめとする全カリ執行部の先生方をはじめ、学部選出の先生方も、その後学部長などの要職に就かれた先生方が多く、いわゆるエース級もしくは学部のホープクラスの先生方が出てこられていた。その当時の全カリが議論し、決定すべき事柄の重要性を思うにこれらの選出メンバーは当然と言えば当然であったと思う。

そのような先生方に囲まれわたしは委員になってはじめて事の重大さを認識した。全カリスタートによって、従来一般教育が担ってきた教養教育課程にも学部が責任を持つこととなる。学部は受け入れた学生を4年間教養教育も含めてどのような教育を与え、どのような卒業生を送り出すのか、と最近声高に叫ばれていることが全カリを発足させた本学ではすでに意識されていたのである。

言語研究室主任の先生方や運営委員会メンバーの先生方とはほとんどの方と初対面で非常に新鮮であった。運営委員会で学部選出の先生方が発言されると「あの学部はそのように受け止めておられるんだ。この学部はいつも費用と効果、提供している労働力などの観点から発言されているな。ここの学部の意見は何が言いたいのかうまく伝わってこないな。」と勝手な感想を抱き、言語部会では英語やドイツ語などの主任の先生方が一緒であり、最初は文化の違いを感じた。もっと正直に言えば、とても共通の日本語で議論が進められているとは思えないほどのショックを受けた。この言語部会で種々の役目を引き受けることになるとはつくづく全カリ組織のふところの深さを実感する。

当時の言語部会の主要案件は新職種の任期付教員制度すなわち嘱託講師（現在の教育講師）制度導入であった。言語研究室主任の先生方はどちらかと言えば導入に慎重で、言語部会長はその制度の持つ利点を強調されるとともに新たな英語カリキュラム展開には不可欠であるとの主張を展開されていた。まだ我が国ではネイティブ対象の制度としてしか理解されていなかった任期付教員制度をネイティブ枠を撤廃して展開しようとする画期的なものであった。この制度は当時の法学部選出委員の上村教授の献身的な働きによって運営委員会での合意が成立し、すでにあと半年に迫っていた言語新カリキュラム展開がその実現に向けて加速されることになる。ネイティブに限ることなく採用に踏み切った嘱託講師の先生方の全カリでの活躍は目覚ましく、任期限度の5年を待たずに他大学の専任教員として転出されるといううれしい（そして実は辛い）成果を生み出して行くこととなる。

言語部会と運営委員会そして事務の方々との様々な議論を経験して行くにつれ、当初感じたカルチャーショックに似た思いは、わたしの所属している理学部の持つ文化が実は全学的視野に立つと異質なものである、ことにも気づくことになり、全カリがわたしの視野を広げる手助けをしてくれていったのである。少なくとも全学的な視点からの発想や議論を当時のわたしに教えてくれたのは全カリであることは間違いがない。

運営委員退任直後に特別教務委員に選任され都合3年が経過し、1999年4月から10ヶ月間特定国派遣研究者としてブラジルに滞在する機会に恵まれ全カリ任務からは退くこととなる。特別教務委員であった1年間実松先生の要請を受け、英語研究室員として研究室のさまざまな議論に参加したこともこれほどまでに全カリ滞在を引き延ばす結果に大きく関与している。

言語部会長から全カリ部長へ

ブラジルから帰国するとすぐ白石言語部会長（当時）から「次の専門委員だから。頼んだよ。」と有無を言わせず専門委員を依頼されることになる。抱えていた懸案事項は言語研究室の室員問題である。一般教育から全カリへの移行において、結果としてトップダウン方式を採用することで革新的な全カリ言語教育が実現することになり、学内のみならず学外からも高い評価を受けていた。しかし、同じ言語を教える立場の専任教員間のな

んとも言えない“しこり“の存在は今後の運営に大きな影を落とす可能性もあり、その解消への取りくみが喫緊の課題と執行部では認識されていた。そして2000年度後期に、全カリ言語の理念と革新的な要素の継続を意識しつつ研究室員問題の解消案が提案され、新研究室員制度が2001年度からスタートすることで合意形成がなされた。

この問題の解決が見えたころに白石言語部会長が次年度社会学部長に選出される事態となり、ここも有無を言わせずの感じでなぜか理学部所属のわたしが本当に場違いの言語部会長に選出されることになった。生まれて以来、なんとか長になった経験は住んでいたマンションの理事長しかなく、ましてや言語専門家がならぶ言語部会の長に就任するとは青天の霹靂とはこのことである。

言語部会長3年その後の部長4年の合計7年間、全カリ事務室を含めたスタッフの方々との真面目な議論や他愛のない会話を楽しみ、また一緒に仕事をしているとの意識を共有したつもりである。言語部会においても運営委員会においても、さらには全カリ事務の方々との打ち合わせにおいても、時としてワンマンとも思えるような会議運営には批判も聞こえていた。また気がついてみると現在全カリに関与している人間としては、全カリ誕生の前後の運営委員会の雰囲気を知る最後の人間となってしまっていた。1年の休みを挟んでの足かけ12年間は長すぎた、と感じる。もう少し前に身を引いていれば少しは格好良かったかもしれない。

わたしにとって全カリとは

与えられた役目によって人は成長する、と言われる。わたしは全カリで様々な役職を与えられ、それを経験することでそれまでの自分の人としての大きさをゆっくりとではあるがステップアップしつつ大きくすることができていったのではないだろうか、と思う。多くの方たちとの関与がある。わたしに対する“教育的指導”の表現がふさわしい関与である。正面からの関与、横からや見えない場所からのもの、また不意打ちもあった。関与してくださったお一人ずつのお名前をあげることは控えさせていただくが、すべて感謝の対象である。

特色GPの2度にわたる不採択とそれと相前後して押し寄せた全カリへの言われなき中傷（とわたしは思っている）、そして特色GPに3度目のチャレンジとなった“立教科目”完成までの全学的な連携と協同作業が実を結んでの採択決定通知受け取りまでの道のり。まだ落ち着き先の見えない“全カリ第2ステージ”のこれまでとこれから。すべてが肉体的にも精神的にも重荷ではあるが、でもそれに関与できることはやはり幸せである。

全カリ事務室とそれをとりまく、人を含めた環境が好きだ。今検討している内容は学生にとって良いことか、を常に判断しつつ責任を持って前進している、その雰囲気が好きだ。

ほっと一息

山本　博聖（理学部助教授）

全学共通カリキュラム運営委員に選任されて、昨年の4月から全カリの委員として働き始めた。全カリとは、一般教育が解体されて、その後どこが語学を始めとする教養教育の責任を持つのかが発端になって作られた組織であろうと、考えていた。運営委員会にちゃんと出席してみなさんのご意見を拝聴して、自分の学部に関連していそうな議題になるとしっかりとメモをとってと、ぼんやりと考えていた。

しかし、どうもそんなのんびりとしたことは言っておれないらしいことをすぐさま思い知らされた。この委員会は学内各学部から委員が2名ずつ選出され、さらに専門委員、なんとか部会長おまけに部長までもそろったれっきとした教授会だったのだ。

「なんだそんなことも知らないで送り込まれたのか」とか、ついでに、「おたくの学部は先生の人数はそんなに少なかったのですか？」とあちこちの会議に便利屋のように顔を出しているように見えるわたしは、ある偉い先生からそう言われもした。

こちらも別に好きでこんな大変な所に……、と思いつつ、自分でも何か役に立つことがあるなら、と引き受けた手前、あまり弱音もはけず……。この委員会は通常の（自分の所属している）教授会とはかなり違うところがある。第一に委員の先生が起きている（眠っていない）。しかも熱心に議論に参加されている（訳のわかることを言われている）。同じ基本的な考えがあってそこからなにかしら目指す大切なことを目標として議論をされている（自分のエゴばかり言い合っているわけではない）。年齢だけは人並みにとっているわたしに“ちゃんと人生勉強をして来い”と、選任された裏にはそんな隠された秘密が実はあったのだと、今更ながらに感心もした。いつも長時間かかり体力を使い果たす委員会に加えて英語人事の委員長までもがまわってきた。ひとを選ぶ観点もそれにふさわしい教養も何もない。人事委員の先生から教えられた通りのことを何とかこなして、どうにかそれも無事終了。しかしまだこのフォーラムの編集の仕事が待っていた。一緒に編集委員を引き受けて下さった文学部のA先生のかわいい笑顔に助けられ、何とかここまでたどりついた。

是非多くの方々にお読みいただき、ご感想などをいただければ幸いである。

さあこれでついに終わりだ。全カリ教務のTさんのうれしいニュースやいろいろな思い出がたくさんありました。「1年間お世話になりました」と言おうとするわたしに、「委員の任期は2年ですよ」とN氏が冷静に規則を告げてくれた。

（『大学教育研究フォーラム』第2号、1997年3月14日、執筆当時は理学部選出運営委員、研究開発・広報委員）

オンデマンド授業「茶・虎そして人」からの報告

文学部教授　上田　信

いつでも、どこでも、インターネットにアクセスできる環境でありさえすれば、授業を受けられる。これがオンデマンド授業の魅力である。

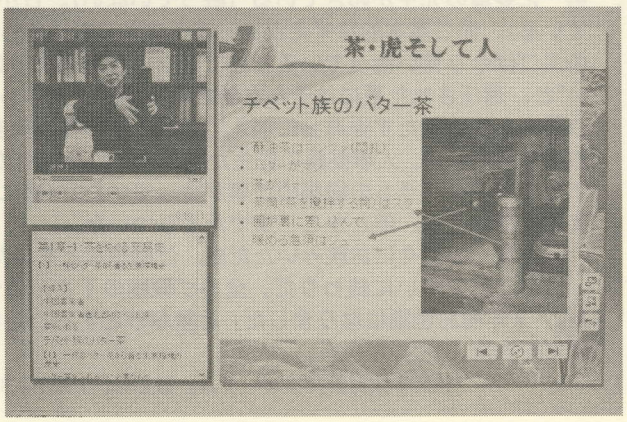
受講生の側から見た場合、早稲田大学のポータル・ネットから履修登録後に渡されたIDとパスワードでオンデマンドのサイトに入り、講師の動画と講義に同期するパワーポイントのスライドとから構成される授業コンテンツを視聴する。毎週、内容が更新されるが、一度見たものは、何度でも繰り返し観ることも可能。聞き落としたところは、少し戻って再確認することも容易。担当の教員と他の受講生とは、掲示板（BBS）にて教員からの質問に答えたり、議論したりすることもできる。試験やレポートも、ネット経由で行う。

教員の側から見た場合には、前年度にコンテンツ作成のために多くの労力と時間とを要するのではあるが、一般的な授業ではなかなか使えない画像や、場合によって海外での取材も可能だという魅力がある。出張先でも学生が書き込んだメッセージを確認でき、評価をつければ、それぞれの学生ごとの得点の合計も計算してくれる。学生の書き込みにすかさずコメントを加え、それに学生が応えてくれれば、知的な往復書簡ともなる。受講生が授業を聴講したか否かも、アクセスの記録として残る。掲示板のテーマや期間も、適宜、設定を変えることができるので、授業の進み具合や受講生の反応を見て、もりあがった話題については期間を延長したり、新たなテーマへと発展させたりすることも可能である。

今年の後期に、私が担当したオンデマンド授業「茶・虎そして人」。中国を中心にアジアにおける生態環境と人間との関わり合いを問いかける内容となった。第1章では、茶などの物産が、生産・流通・消費のそれぞれの局面で、深く自然と関わってきたことを紹介する。絶滅に瀕したアモイトラが、ながい歴史のなかで人に追い詰められ、ついには絶滅に瀕するまでのプロセスを追った第2章。最後に、アジア各地で環境の保全などの現場を見てきた方々との対談を行った。奇妙なタイトルにひかれて受講した学生は、本学30名と早稲田大学30名の合計60名であった。そのやりとりの一端は、次頁で紹介する。

オンデマンド授業の問題点としては、はじめから一回もアクセスすらしない学生が、けっこういるということ。人数制限科目なので、これはかなりもったいない。追跡調査をしないと理由は分からないが、学生がコンピューターに親しんでおらず、思いもかけないところでつまずいているのかも知れない。また一つの科目を作成するのに、費用がかかりすぎるというのも、これから展開していこうとしたら大きな足かせとなるであろう。費用の半分が制作会社への支払い、というのも問題である。教室で普通の授業を収録し、学内スタッフでコンテンツとして編集する、そのような設備と人員の配置が可能であれば、費用も軽減され、機動的なコンテンツ造りが可能となる。

メリットとなるのは、学生が時間に拘束されずに履修できる点。就職活動などでいそがしい今どきの学生には、魅力であろう。将来は、通常科目にオンデマンドを組み合わせれば、やむを得ず欠席した回の授業をネットで視聴したり、ノートを取り損ねたり聞き落とした内容を確認したりすることができよう。対面式とネットとを組み合わせ、大学に諸般の事情で出にくい学生を受け入れるということも考えられよう。また遠隔地や海外の大学と互換することで、「ご当地」授業など、個性的な内容の科目が生まれるのではないか。制作したコンテンツは、大学の資産として映像アーカイブとして保存することも考えられる。



「茶・虎そして人」の掲示板から

この授業では、４回にわたりそれぞれテーマを定め、掲示板（BBS）による質疑や情報・意見の交換を行った。その一端を紹介しよう。

上田：（自己紹介を兼ねて）授業担当者の上田です。まずは、みなさんの自然（生態環境）との関わりについて、メッセージを寄せてください。話しやすいトピックとして、下記のテーマでお願いします。「自分の人生で、最初に見知った、野外の植物は何でしょうか」。なお、このディスカッションへの書き込み、参加度合いなどは、評価にも反映されますので、奮ってドシドシ書いてください。

学生Ｎさん（早稲田）：生まれは長野で、植物はまわりにたくさん生えている状況で育ちました。私が最初に知ったのは、「オオイヌノフグリ」だと思います。幼稚園のころ、小さくてきれいなその花が大好きだったのに、名前が難しくなかなか言えなかったのを覚えているからです。幼稚園で、何度も何度も先生に教えてもらいました。学名は *Veronica persica*（ゴマノハグサ科　クワガタソウ属）だそうです。

上田：オオニヌフグリの語源を調べてください。その可憐な花をみると、もっとすてきな和名をつけてもらいたい、と感じています。

学生Ｋさん（立教）：初めまして。「オオイヌノフグリ」という名前を聞いたことがなく、名前の不思議さから興味を持って自分で調べてみました。花びらの青紫がとてもきれいで素敵な花ですね。でも名前の由来を知って驚きました。実がハートの形に似ていると書いてあったので、もっと可憐な花に似合った和名をつけられるはずですよね。

学生Ｇさん（早稲田）：横から失礼します。オオイヌノフグリの語源を小さい頃国語教師に教わった時、少なからず衝撃をうけた事がありました。しかしこの和名は近縁の「イヌノフグリ」にちなんだもので、実の形を見たことがありますが「イヌノフグリ」と全然似ていませんでした。オオイヌノフグリはヨーロッパ原産という事を知って英名などを調べてみたんですが、Birdeye Speedwell, Bird's Eye（鳥の瞳）、Persian Speedwell（ペルシアのクワガタソウ）など和名とは違い綺麗な名称がつけられていました。（個人的に Bird's Eye が気に入っています）。日本語でも（あまり聞きませんが）星の瞳、瑠璃唐草などの異称があるそうです。国が違うと随分と外見から連想する言葉が異なってきて、面白いなと思いました。

上田：英語名は、本当にすてきですね。日本語の異称などと併せて頭に入れて、今度の春、この草をルーペでみてみましょう。

学生Ｍさん（早稲田）：どうなのそれ？っていう名前は結構ありますよね。私はウメモドキという植物が前々から相当気になっています。いくら葉が似ているからって、一生懸命生きているのに「擬き（もどき）」ってひどいと思うんです!! すいません。一人でテンション上がってしまいました。

上田：植物学者が中国で植生の調査をするのに同行したことがあるのですが、日本にない植物に、あまり深く考えることなく和名をつけていました。植物を専門とする人にとっては、ラテン語の学名が大切で、けっしておろそかにしないのですが、和名は、あわただしい調査のなかで、パッとひらめいたインスピレーションで、頭に刻み込みやすい名前をつけているようです。「何とかモドキ」という植物は、結構多いのですが、おそらく、和名を決めた植物学者が、個人的によく知っている植物に似ていたためにそうした名をつけたのではないでしょうか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それぞれのコメントからさらにコメントが続くと、学生同士がテーマに関して調べ、互いに教え合うようになる。学生の書き込みに適切に応対し、さらに話題提供者が続くように持っていくのは、担当教員側にも準備と素養が必要。なかなか苦労はするけれども、学生から教えられたり、刺激を受けたりと、けっこうおもしろい。同じコンテンツで来年も展開するのであるが、いったいどんな学生が来るのか、楽しみである。

全カリ科目を担当して：全カリにおける美術科目

文学部准教授　黒岩　三恵

年度も終わりに近づき、学生たちの１学期の成果をレポートや筆記試験の答案から読み取る作業を続けている。評価を下さなければならないのは憂鬱だが、教室での発言には消極的になりがちな学生との一対一の対話の貴重な機会とも感じるひと時である。

あっという間に過ぎた１年を通じ、全学共通カリキュラムという制度と複数コマ展開されている美術関連科目が持つ利点と可能性については、様々なことを感じた。全学の学生に開かれているのであれば、人文学的な美術研究という軸を保ちつつ、たとえば「美術」とは呼ばれない視覚的装置・人工物との連関等の越境的な視点や、美術作品を見ることを可能にしている視覚、光学、心理学等の自然科学的視点、透視図法や色彩法など美術作品を生み出す技術における文化的な側面と科学的な側面の双方にまたがる視点など、一つの学問領域にとどまらない複合的な授業展開について、今後研鑽を積んでゆかなければならないことは多い。ここでは、全カリにおける美術科目、教室で美術作品について何かを講じることの難しさを考えるに際し、二つの逸話から始めることにしたい。

一つ目は、日本美術史において独創的な業績をあげてこられたＴ先生の授業について筆者が母校の先輩から聞いたことである。ある年の日本美術の通史、先史時代から近代まで講じることを予定していた授業において、実際に１年間講ぜられたのは、縄文時代の土器だけであったという。講義中のＴ先生は概して寡黙で、少ない言葉の意味するところを汲み取ることが、学生を待ち受けている最初の大きな難関であったともいう。

もう一つは、西洋中世美術の恩師Ｓ先生の講義に関するものである。講義中、滔々と水が流れる如く明晰な講義をされるＳ先生の声が途切れることがなかった点において、Ｔ先生の講義とは対照的といえる。ただ、スライド映写機が映し出す作品に即して論じる段になると、Ｓ先生は言葉をあれこれと捜した挙句、結局はスクリーンのそこを鋭く指示し、「ほら、このところです。そしてここも。」と、言葉よりも身振りで結論を提示することが一度ならずあったのが、筆者には意外に見えたものである。

全カリの美術関連科目について考えるに当たり、二つの逸話から汲み取るべきものは何だろうか。１年間縄文式土器だけを講じたＴ先生の真意は不明だ。しかし、入手可能な作例について、その外観、技法、推定可能な制作年代などを比較・検討していく講義の積み重ねを通じて、既存の美術教科書が提示する確定した歴史的な枠組みの側ではなく、作品を研究する側から縄文式土器の歴史の叙述が組みあがっていくプロセスがリアルタイムで学生の眼前で展開されただろうことは確かだ。

そして、講義中はＴ先生がしばしば沈黙し、Ｓ先生もスライドを前にしては、身振りが言葉に先行したのは、美術作品の持つ複合性と総合性を分節的な言語におき替えて解説することの困難さ、殊に口頭で論述しなければならない時にその困難が最大限に増すことを示していよう。縄文式土器でも、西洋美術なら「磔刑」のような図像でも、作品の形や表現方法、意味内容をある程度語りつくすことに成功したとしても、かなりの部分が不明のまま、作品の本質には到達していないのではないか、との疑念が生じることもある。

ならば、講義というものは何かがすっきり定式化されて学生に提示されるというだけでなく、わからないものを随伴しつつ僅かな可能性が慎重に提示され続ける場でもあるといえよう。全カリの現プログラムでも、最新の美術史的・学際的アプローチを取りながら学生たちに多彩な美術作品とその見方を紹介するのは実現が容易なことのように思われる。他方、「まだ語ることができない」部分について、どのようにこれを学生と共有しともに考えることができるのか、という点こそが今、筆者にとっては最大の課題であるように感じている。

2007年度　全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

＜言語教育科目担当部会＞

◆英語教育研究室
　4/5　前期ＦＤセミナー
　6/29－7/21　前期カリキュラムアンケート実施
　6/30　前期担当者連絡会
　9/19　後期ＦＤセミナー
　12/1　第９回大柴杯記念スピーチコンテスト
　12/8　後期担当者連絡会
　　・次年度カリキュラム担当について
　12/17－1/12　後期カリキュラムアンケート実施
◆ドイツ語教育研究室
　7/23, 2/19　担当者連絡会
◆フランス語教育研究室
　6/29, 12/13　担当者連絡会
◆スペイン語教育研究室
　7/25, 1/30　担当者連絡会
◆中国語教育研究室
　7/28, 1/12 担当者連絡会 2/1 ワークショップ
◆諸言語教育研究室
　7/2, 12/14　担当者連絡会
◆日本語教育研究室
　7/21　担当者連絡会
◇言語科目共通
　6/29－7/21, 12/17－1/12
　言語教育科目授業評価アンケート

＜総合教育科目担当部会＞

◆総合部会
　3/7　総合部会担当者懇談会
◆スポーツ人間科学教育研究室
　4/3　担当者連絡会
◆「立教生の学び方」
　6/20, 11/22　担当者連絡会

＜学　外　対　応＞

9/4　同志社大学教務部　来学
　「教養教育の推進体制について」
12/19　東海大学　来学
　「立教大学における自校教育の取組について」

＜学　外　講　演＞

6/26　大学コンソーシアム京都公開研究会講演
　「全学共通カリキュラムについて」
　山本　博聖　全カリ部長

＜特色ＧＰ「立教科目」関連＞

◆「特色ＧＰ採択記念シンポジウムⅢ」開催
テーマ：「e ラーニングと全カリ」
日　時：2007 年 12 月 3 日（月）18：00～20：30
　池袋キャンパス A204 教室
基調講演：「大学教育における e ラーニングの現状とその可能性」
　吉田　文　氏（独立行政法人メディア教育開発センター研究開発部教授）
事例報告：
　1.「Rikkyo English Online プロジェクト」
　　川﨑　晶子（英語教育研究室主任、コミュニティ福祉学部教授）
　2.「オンデマンド授業『平和と安全保障』の試み」
　　五十嵐　暁郎（法学部教授）
　3.「立教大学の e ラーニング環境の支援体制」
　　佐藤　雅信（メディアセンター職員）
指定討論者：
　山口　和範（教務部長、経営学部教授）
司　会：
　松本　　茂（全カリ運営委員、経営学部教授）

◆DVD 版「立教チャレンジ 2008」の制作
　学生部、キャリアセンター、チャプレン室事務課
◆「オンデマンド授業『聖書考古学入門』（2008 年度後期開講予定）」の制作（5/1－3/31）
　月本　昭男（文学部教授）
　メディアセンター
◆「履修計画・登録案内コンテンツ（2008 年 4 月 Web 掲載予定）」の制作
　全カリ運営センター、教務部
　メディアセンター

2007年度　全学共通カリキュラム運営センター　メンバー一覧

2008. 3. 1 現在

＜運営委員会＞

	氏　名	所属		小委
部　長	山本　博聖	理	物理	—
部会長	谷野　典之　☆	経済	経政	言語
	上田　信	文	史	総合
学部選出	菊池　清明　☆	文	文	言語
	('07.9まで) 弘末　雅士	文	史	総合
	('07.10より) 小野沢あかね ☆	文	史	総合
	須永　徳武	経済	経済	言語
	小澤　康裕　☆	経済	会計	総合
	柳町　朋樹　☆	理	物理	言語
	松山　伸一	理	生命	総合
	三浦　雅弘　☆	社会	現代	言語
	桜井　厚　☆	社会	社会	総合
	林　美月子　☆	法	法	言語
	中北　浩爾	法	政治	総合
	舛谷　鋭　☆	観光	交流	言語
	松村　公明	観光	交流	総合
	藤井　敦史　☆	コ福	コ政	言語
	西村　裕美　☆	コ福	コ政	総合
	松本　茂	経営	国経	言語
	Roy,Larke　☆	経営	経営	総合
	大石　幸二	現心	心理	言語
	森　秀樹	現心	映像	総合
専門委員	(08.1まで) 森　聡美	法	法	言語
	(08.1より) 佐竹晶子 ☆	経済	経済	言語
	佐藤　邦彦　☆	社会	現代	言語
	中島　俊克	経済	経済	総合
	安松　幹展	社会	メ社	総合

＜言語構想小委員会＞

谷野典之、菊池清明、須永徳武
柳町朋樹、三浦雅弘、林美月子
舛谷鋭、藤井敦史、松本茂
大石幸二、川崎晶子、新野守広
中島弘二、飯島みどり、細井尚子
石坂浩一、池田伸子
森聡美／佐竹晶子、佐藤邦彦

＜総合構想小委員会＞

上田信、弘末雅士／小野沢あかね、
小澤康裕、松山伸一、桜井厚、中北浩爾
松村公明、西村裕美、Roy,Larke
森秀樹、加藤定彦、是永論
山田裕二、長島忍、佐野信子
安松幹展、中島俊克

☆印は2007年度新任

＜言語教育科目担当部会＞
部会長：谷野　典之

研究室名		氏　名	所属	
英　語	主任	川崎　晶子	コ福	福祉
		一ノ瀬 和夫　☆	経済	経済
		高山　一郎	経済	経済
		佐竹　晶子	経済	経政
		平賀　正子　☆	社会	メ社
		森　聡美	法	法
		Caprio,Mark E. ☆	法	国比
		鳥飼 慎一郎	法	国比
		山田 久美子	法	政治
		久米　昭元	経営	国経
		野田　研一　☆	経営	国経
		高橋　里美　☆	経営	国経
		鳥飼 玖美子　☆	経営	国経
		Cunningham, Paul A.	観光	交流
		Glick,Christopher	観光	交流
		小林　悦雄　☆	コ福	福祉
		Cousins,Steven E. ☆	コ福	コ政
		Allum,Paul H.　☆	現心	心理
ドイツ語	主任	新野　守広	社会	現代
		竹原　創一	文	キ
		井出　万秀　☆	文	文
		小松　英樹	社会	社会
		宮内 敬太郎	コ福	コ政
フランス語	主任	中島　弘二	コ福	福祉
		澤田　直　☆	文	文
		桑瀬 章二郎	文	文
		吉岡　知哉	法	政治
		Delmont-Hosaka, Marie	法	政治
スペイン語	主任	飯島 みどり	法	国比
		佐藤　邦彦	社	現代
中国語	主任	細井　尚子　☆	社	現代
		谷野　典之	経済	経政
		呉　悦	経済	経政
		笠原　清志	経営	経営
諸言語	主任	石坂　浩一	経済	経済
		谷野　典之　☆	経済	経政 *
		漆山　秋雄	理	化
日本語	主任	池田　伸子	経済	会計
		李　鍾元	法	政治
		田中　望	観光	交流

＊言語部会長の兼務

＜総合教育科目担当部会＞
部会長：上田　信

研究室名		氏　名	所属	
人文学	主任	加藤　定彦	文	文
		月本　昭男	文	キ
		(前期) 小野沢あかね	文	史
		(後期) 弘末 雅士　☆	文	史
		黒岩　三恵　☆	文	文
		佐々木 一也	文	文
社会科学	主任	是永　論	社会	メ社
		関口　智	経済	経政
		原田　久	法	政治
		原田　晃樹　☆	コ福	コ政
自然科学	主任	山田　裕二	理	数
		原田　知広　☆	理	物理
		加藤　中英　☆	理	化
		上田　恵介	理	生命
情報科学	主任	長島　忍	経済	経済
		深津　行徳	文	史
		眞島　恵介	理	生命
		泉本　利章	観光	観光
		小林　悦雄	コ福	福祉
スポーツ人間科学	主任	佐野　信子	社会	現代
		大生　定義	社会	社会
		安松　幹展	社会	メ社
		沼澤　秀雄	コ福	福祉
		濁川　孝志	コ福	コ政
		松尾　哲矢	コ福	コ政
		都築　誉史	現心	心理

全カリニューズレター　No.23
印　刷　2008.3.25　発　行　2008.3.31
発行人　山本 博聖
編集人　桜井 厚、松本 茂、Roy,Larke、森 聡美
発行所　立教大学
全学共通カリキュラム運営センター
印　刷　神谷印刷株式会社